



エネルギー問題を皮肉る

堤

繁*

私は最近偶然にも有名なルーツの原本を見る機会を得た。その9頁に世界とは、世の中とは (the way of the world) こんなものだど皮肉っている。ある日、少年が湖畔に出たところ、網にかかって悲鳴をあげている「ワニ」に会った。勿論「ワニ」は少年に助けを求めたが、少年が「ワニ」に近づくと少年は「ワニ」に「パクリ」とやられてしまった。「ワニ」と少年どちらが正しいか、「ワニ」は側を通った年とった「ロバ」と馬それに兎に意見を求めたが、前二者は自分らは年をとって働き場所もなく、それどころでないとなーコメントであった。ところが兎は初から終りまでの経過を聞かなければ、どちらともいい難いと返事したところ、「ワニ」は「パクリ」を止め少年を開放した。少年は早速村に帰り、村人を集めて「ワニ」を殺しかかった。ところが村人がつれて来た犬が「ワニ」でなく恩人の兎を「パクリ」と殺した。悪玉は善玉を駆逐する。これが世の中だと。

さて昭和48年末に起った石油ショック、正に日本は石油産油国に「パクリ」とやられたことは間違いない。国内では石油の値上げ、売惜み、しかしこれに拍車をかけたのが情報公害で、日本の一流の新聞さえ、石油はもう10年したらなくなると極論した。ところが数年たった今日、当該新聞は石油はそう早くな

くなるものではなく、今後はその価格が問題だと「ケロリ」とした論評をしている。

つぎに最近の話題は、円高・ドル安のダブル・ショック、正直と勤勉な日本人が外国から資源を輸入し、優れた技術でせっせと勝ち得たドルの大黒字、自由貿易 (Free trade) の考え方を換え、Open trade, Fair trade, Organized trade の美名の下に黒字減しを迫られている日本人、これを正直に実行せんとしている日本人、しかも中性子爆弾の出現によって影が薄くなった原子炉関係をこれに充当するとか、どこまで日本人は正直かといいたいところであるが、この馬鹿正直が続く限り日本は安泰だとの考え方もないではない。

さて私の知る所では世界全体の所要エネルギーを石油のみに依存したときの石油の耐用年数90年、一方石炭のそれは1,000年、これからみると少くとも今後200年は大丈夫だろう。ただし日本ではドルの黒字が持続するときのみ当てはまることで、この点ではドルの黒字減しとは逆な努力が必須となる。

新しいエネルギーを求めて、原子力, Solar energy, 地熱, 海洋発電, 水素燃料など、これら程PRの浮き沈みの多いものはない。これらの開発に対しては Slowly and Steadily なジミな努力が切望される場所である。

終りに上述のルーツで引用した少年と兎、どちらに日本人が該当するか、これは読者諸賢の判断にお任せしたい。

* 堤 繁 (Shigeru TSUTSUMI). 阪大名誉教授, 三洋電機 (KK), 中央研究所, 顧問, 理学博士, 石油化学, 触媒化学